

東北・被災地巡検の生徒感想

* 東北・被災地巡検に行ってみて(3631N)

今回東北・被災地巡検に参加できたことはとてもいい経験で、企画してくださった先生方、お金を出してくれた両親、貴重な話を聞かせてくださった語り部の方々にはとても感謝しています。ですが、僕は今回の巡検から自分が震災とどう向き合っていくか、これから被災地はどうするのがいいと考えるのかというような結論は出ていません。もちろん被災地を見て回ったり、語り部さんたちが話してくれたことの中で、悲しくなったり、応援したくなったりはしたのですが、それで東日本大震災の全体像がつかめるはずもなく、何とも言えない不安感と悲しみが蓄積されていくだけでした。

初めに訪れたさんさん商店街では、とても拍子抜けしました。まだたくさんの瓦礫が山住になっている姿を想像していたので、観光客が訪れることのできる商店街があることに震災の爪痕はなくなっているように感じ、安心しました。しかし、ポータルセンターに入って、見て回っているうちに震災は確かに存在したことを実感させられました。また勝倉さんの話では震災の記憶で苦しんでいる人々がいること、震災で家族を亡くして苦しんでいる人々がいることに気づきました。バスに乗って東北内を移動していると、瓦礫こそないものの、更地が広がっていて、まだまだ復興しているという風には見えず、自分の認識の甘さに気づくとともに、この巡検に参加して良かったと思いました。またこの様なら、被災地に足りないのは工事をする人とお金だと早とちりしてしまいました。しかしすぐにそれは間違いだということに気づきました。盛り土という工事の大変さ、震災遺構などに関する役人と住人の話し合いというものの難しさ、日本は貝塚が出やすいために土地が使えない現状などそれぞれが複雑な問題がたくさん絡まっていたのでした。これからも東北地方は復興の過程でたくさんの課題にぶつかることは言うまでもありません。しかし高台から「希望の灯り」が見守っているのを見て、これからも日本全体で東北を復興に向けて支えていけると思いました。

* 東北・被災地巡検旅行の感想(3624T)

僕がこの研修に参加して良かったと思ったことは三つほどある。一つには震災を実際に経験した方のお話を聞くことが出来た、ということがある。一人で行ったり、友達や家族で行ったりするのは語り部の方やバスガイドの方のお話を聞くのはなかなか難しいと思うからだ。また震災を実際に経験した方から直接聞いたことで東日本大震災に対する理解を深める事ができたと思う。

南三陸町の語り部、原さんからは 5m のチリ地震津波の反省を生かし防潮堤は 5.5~6m の高さで設置されていたのに今回の津波は高いところで 30m もあったという話やライフラインもすべて止まりお昼にバナナ 1 本とかせんべい 2,3 枚という状態だったと聞いた。また物より「元気？」

「生きていたの？」といったような誰かの記憶や消息が大事だったとおっしゃっていた。

同じく南三陸町の語り部、勝倉さんからはチリ地震津波が来る前は揺れたら津波が来ると言われてきたが来た後は異常引き潮なら津波来るとも言われるようになったという話や仮設住宅についての話を伺った。仮設住宅は四畳半の部屋2つとトイレと風呂がついているそうだ。また基礎を造ってはならないのだという。テレビや冷蔵庫、洗濯機、エアコン、電子レンジなどは仮設住宅から出る際に持って行って良いということだがこんなにも狭いのか、と驚いた。また海沿いの道路に沿って逃げたことにより、逃げていないのと同じことになってしまったという。これからは高台に向かって放射状に道路を造るべきだとおっしゃっていた。町民の中には両親を亡くした人もいるので物資も大事だが心のケアの方が大切という。「人のありがたさが分かった。この震災を風化させない、忘れない、恩返しができるようにしたい。」とおっしゃっていた。また海沿いの道路に沿って逃げたことにより、逃げていないのと同じことになってしまったという。これからは高台に向かって放射状に道路を造るべきだとおっしゃっていた。南三陸町の語り部さんの二人が共通しておっしゃっていたのは心のケアがとても大切ということだった。

気仙沼市の語り部、緒方さんは次のようなことをおっしゃっていた。普段から避難ビルに逃げろと言っていた。ところが皆、大川にかかっている橋は三本しかないのにも関わらず、車で山へ逃げようとしたという。糞詰まり状態になってしまい津波で皆流されたという。テレビや新聞などでは避難場所に指定されていたところにも津波が来たという事ばかり報道していたが、これと反対のことも起きていたと知り、とても驚いた。また緒方さんは私たちに中二の作文を読んでもらった。その方は震災で母と祖母を亡くしているそうだ。しかしそれでも前を向いている姿勢に感動した。緒方さんは私たちをお願いしたいこととして「日々毎日毎日を精いっぱい生きてください。命を大切に、友達を大切に励ましあってずっと生きてください」とおっしゃっていた。僕はこの言葉にとっても感激した。

陸前高田市の語り部、河野さんも実はここまで津波はこないと思っていた一人だったという。普段からどうやって助かるか考えておくということも大事だとおっしゃっていた。わたしたちへの願いとしては「近くの人がどれほど苦しい思いをしているか覚えておいて見守ってほしいそうだ。そして来てほしい。」とおっしゃっていた。

気仙大工左官伝承館と希望の灯りのガイドの方は三つの願いとして①車は切り返して止まる。②携帯電話に家族全員で親戚の電話番号をいれる。③津波てんでんこ、を挙げていた。この三つは津波対策に使えるだけではないと僕は思う。①は将来車をもったときに使える。②はどの災害にも使える。③はそれぞれが生きる道を選ぶということだからどの災害にも使えると思う。三つの願いは僕でも実践可能だと思うので意識していきたい。

バスガイドの岩手県宮古市出身の飯田さんは震災が起こったとき高1だったそうだ。校長先生の判断により海の近くの避難路を通るのではなく学校の屋上に避難したそうだ。先程の河野さんはあるスーパーマーケットについておっしゃっていた。そのスーパーマーケットは「大地震が来たらお客さんを優先して高台に逃げろ」と社長から教えられていたという。全員助かったそうだ。この例や飯田さんの例からトップの方の判断が大事ということがよく分かった。

このようにテレビや新聞ではあまり報道していなかったことを聞くことができたり、震災を実際に経験した方の願いを知ることができたりした。とても有意義なことだったと思う。

二つ目には震災遺構を自分の目で見る事が出来たということがある。奇跡の一本松や防災庁舎などは写真で見た事はあったものの実際に見てみると迫力があつた。僕は東北・被災地巡検旅行に行く前震災遺構は残すべきだと考えていたが、行ったことで犠牲者が多かったところはその限りではないと考えるようになった。被災者の気持ちを少しは理解する事ができたのでは無いかと思う。

三つ目には「はまべのちから 2014@小田の浜」でお手伝いをできたということがある。気仙沼に来自衛隊の方は缶詰を食べて、気仙沼の人たちには温かいごはんや風呂を焚いてくれたという。私たちは自衛隊の方のようにしっかりとしたボランティア活動は出来ていないものの少しは力になれたと思う。僕はビーサンとばし大会に参加した人を参加賞が置いてあるところに誘導する係をやった。当初は小さい子への話しかけ方がよく分からず戸惑ったが最後の方は自分なりにきちんとできたと思う。

僕は東北・被災地巡検旅行に参加してこの被災地が5年後、10年後どのように復興していくのかに興味を持った。「高校生、震災と向き合う一舞子高等学校環境防災科の10年」では、人は新しく災害が起こるとそちらにばかり行ってしまつて古い災害は忘れられてしまうというような事が書かれていた。僕はこの震災を忘れず5年後にもう一度行ってみたいと思うようになった。

* 被災地研修に行って考えたこと(4737Y)

南三陸町のさんさん商店街のお店でTシャツを見つけました。そのTシャツには、このようなロゴが入っていました。

“live to love the sea, live to love you, live in MINAMISANRIKU”

今、この研修を振り返ってみて、改めてこのロゴを見ると「なるほど」と考えさせられます。僕は「それでも海を愛する人たち」に出会ってきたのです。復興商店街で出会った方、語り部の方、バスのガイドの方、大島で出会った多くの方々みんな「それでも海を愛する人たち」なのだと思います。彼らは被災地に留まり、海と暮らす生活を選び、復興に向けて動いているからです。この研修に参加した他の生徒の「参加する動機」を読んでいると「なぜ、彼らは被災地に留まるのか」という疑問を見つけました。その疑問に対し、僕はこの研修を通して「それでも海を愛する」彼らの姿に1つの答えがあるのではないかと思いました。

彼らは僕に「震災」を語ってくださり、僕はその一部を学びました。この「震災学習」というものに、僕は当初、違和感を覚えました。災害が起きてからまだ3年という年月しか経ていないのにも関わらず、被災地に赴いた僕はボランティアをするのでもなく、被災者の方の語りを聞いて被災地をただ巡検する。これでいいのだろうかと思いました。しかし、「語り」を聞いていると、被災地の様子を見ているだけでは伝わらない、たくさんの方がわかりました。そして、「これでいいんだな」と思いました。災害が起こり、まだ復興していない被災地に多くの方が外部から訪れ、被災者の方は「語り部」として「災害」を伝える。こんな取り組みが以前の災害にあったのでしょうか。少なくとも、僕が知る限りでは初めてでした。僕はおそらくその点でためらいがあったのだと思います。しかし僕にとって「震災学習」というものは、学ぶことが大いにありました。そして被災者の方も家にいるよりかは、こうして「震災」を周りに伝える方が彼らのとって

も、プラスになるのではないかと思いました。被災地の方が「語り部」として「災害」を語り、来訪者はそれを聞き、「災害」を学ぶ。この「震災学習」という取り組みはお互いにいい関係なのだと思いました。「災害」を教訓にするためにも、この関係は残してもらいたいと思いました。

僕は「それでも海を愛する人たち」、そして彼らと出会う機会をくれた先生方、そして、この研修に行かせてくれた親をはじめとする、本当にたくさんの人に感謝しています。

ありがとうございました。

* 被災地巡検旅行の感想(42061)

被災地巡検旅行の感想を述べるに先立って、まずは今回の企画を考案して下さった海城の先生方と、バスガイドさんや運転手、語り部の方々やホテルの案内をして下さった方々に、お礼を言いたいと思う。本当にありがとうございました。被災地を訪れるには様々な条件が揃わなければならない、誰もが簡単に被災地に入れるわけではない。被災地へ行きたいのに条件が揃わず、被災地に行くことができない方はたくさんいると思う。被災地に入ることができる人は少数であり、むしろ条件的に恵まれているといえる。私達はその恵まれた環境と、そのような環境を提供して下さった方々に感謝を示すべきである。

では早速、被災地巡検旅行の感想を述べていく。形式としては、それぞれの日にどのようなことをしてどのようなことを学んだのか、ということ述べ、最後にまとめて結語する。

初日。朝は晴れ、気温もまずまず高く最高のコンディションでその日はスタートした。私は関東圏から出たことはほとんどなく勿論新幹線に乗ることもないので、いちいちシャッター音を鳴らすことになってしまう(苦笑)。無駄話はさておき、くりこま高原駅に着いて最初に感じたのは、自分が思っていたよりも暑かった、ということだ。日差しも強く、無風に近かったのでそう感じられたのかもしれないが、あまり東京と変わらなかったように記憶している。そこからバスに乗り、見るからに若そうなバスガイドさんに不安を抱いたが、原稿を見ずにしっかりと話して下さっていたので、自分が言うのも変だが立派だな、と感じた。多くの時間をバスで過ごすので、バスガイドさんがしっかりしているところらのモチベーションも上がる。こうして南三陸へと向かったが、津波の被害に遭った地を見て漠然と思ったのは、自分が思っていたよりも復旧が進んでいる、ということだ。津波で流されたがれきは一掃され、家のあった場所は野原のようになっていた。しかし、所々に津波によって建物の骨がむき出しになって残っているものもあり、それには唖然とした。さんさん商店街に着き、ウニ丼がおいしそうだったのだがとても高かったので断念し、ネギトロ丼を食べた。席が空いていなかったので外で食べたのだが、とてもおいしかった。また、最終日に「はまべの力 2014」のイベント応援スタッフとして着るTシャツを買い、目のある珍しいモアイ像と記念撮影をした。非常に遠い位置にあるチリから送られたものだそうで、チリ地震をきっかけにこんなにも離れた国で絆が結ばれていることに驚いた。逆にいえば、それほど地震とそれに伴う津波の人々に与える影響が大きいのだ。また、学びのプログラムでは南三陸町における津波の被害状況・復旧状況などについて学んだ。数ある貴重なお話の中で一番心に残ったのは、被災者の心のケアと、人のありがたさを風化させないことの大切さだ。先ほど申し上げた通り、がれきが取り除かれるなどハード面の復旧は進んでいるが、3年半近く経った今も

なおソフト面の向上は難しい。また被災地巡検の参加動機でも申した通り、私は人のありがたさを東北地方太平洋沖地震で身に染みるほど強く感じた経験があるからこそ、この言葉に共感できたのだと思う。この講演の後、南三陸町の街並みを見ながら気仙沼プラザホテルに着いたのだが、その間、バスガイドさんの“復興”と“復旧”は違うという話に感銘を受けた。なお、ホテルに着いてからのことは書こうと思えばたくさん書けるのだが、ここでは省略する。ミーティングでは全員が自分たちの感想・意見を言い、そのことについてみんなで話し合うという場になったのだが、その内容の濃さにはとても驚いた。確か2時間近くやったような気がする。しかし2時間には感じられないほど場の空気が良く、自分も集中していたのだと思う。ミーティングはみんなの見聞を共有するだけでなく自分自身の考えを整理するのにも大変適していて、有意義に過ごせた。こうして1日目は無事終了した。

2日目。布団から出ると、冷房をつけていたせいかやけにひんやりと感じた。まずは気仙沼港に行き、競りにかけられる魚や獲った魚の様子を間近で見ることが出来た。また、気仙沼港の概要や大型船がどこから来たのかを知る方法を教えてもらい、遠く宮崎県から来た船もあった。津波の影響で港も被害を受けたとは聞いていたが、港も復旧が進み特に目立った傷はなかったが、所々で柱が地盤沈下のせいか沈んでいた。語り部の尾形さんによると、その原因に水産会社が地下水を大量にくみあげたことが考えられるそうだ。その後、尾形さんのガイドで気仙沼市内を巡った。尾形さんの話では、主に津波の被害状況と命の大切さについて学んだ。街には、いたるところに津波の浸水状況を記した看板があり、こんな所にまで津波が押し寄せたのか、と驚きを隠しきれなかった。また、唐桑半島の近くにある大島という島にも津波が押し寄せ、その津波は防波堤をはるかに超え、大島を2分したそうだ。まさに、津波が‘想定外’であったことが良く分かる事実だ。だからこそ行政も、人々にこの事実を風化させないようにと看板を立てたのだと思う。次に、命の大切さについてだ。水産会社では、津波が接近しているにも関わらず普段の業務をこなすことに意識を向けていて、軽視していたそうだ。それは社長の判断で、逆らうことは難しかった。その中のたった1人の職員は危険を察知して、「クビになっても何でもいから、逃げます。」と言って逃げたそうだ。そしてこの職員のみが助かり、社長を含む他の職員は皆津波に飲み込まれ、亡くなってしまったそうだ。まさに、“自分の命は自分で守る”ことの大切さが分かる。また、母と妹、祖母を亡くした少年の感想文を尾形さんが時々声をつまらせながら紹介して下さったのだが、その内容が衝撃的で、少年が将来学校の先生になってこの経験を後生に残したい、そのために今は非常に熱心に勉学に励んでいる、と言った時は、本当に胸にこみあげるものがあった。この少年がどういう思いでこの文章を書いたのか、もし自分自身がこのような経験をしたらどう生きていけば良いのだろう、そう思うと、いてもたってもいられない。さらにその少年は私と同年代だそうだ。一言葉には表せないほど辛い、それでもこのことを絶対に風化させずに、残していこう。その思いに私自身が逆に言葉も出ない。次に陸前高田に向けて移動したのだが、陸前高田に到着して分かったのは、ベルトコンベアを導入するなど、他地域よりも津波の被害が大きかったことだ。語り部の河野さんの話では、その理由は、陸前高田は平らな土地が広く、津波を抑える準防波堤のようなものがなかったからだそうだ。確かに、辺り一面が平坦な土地だった。またそこにはこれからも残される建物と取り壊されようとしている建物があり、その区別は、その建物で人が亡くなったかどうか大きい、と河野さんはおっしゃった。それは、地上に打ち上げられた第18共徳丸をはじめとして、残すものと取り壊すものをどういう基準で分けているのだ

ろう、という疑問に答えるものだった。また気を付けるべき点として、1 点目に、駐車場に車を入れる際は後ろから入れる。2 点目に、親戚の電話番号（連絡先）を認識する。3 点目に“津波でんでんこ”（自分の命は自分で守る）。これら 3 点を忘れないようにすることが必要だと聞いて、家族と話し合っただけで親戚の電話番号はほとんど登録しておいた。こうしておく、いざという時に身近な人の存在を確認することで安心できる。そして、フェリーで移動し休暇村 気仙沼大島に着き、そこで夕食を食べた後、ミーティングを行った。1 人ずつ言うともうあまりにも時間がかかるといって、今回は挙手制だった。にもかかわらず、意見は飛び交いあつという間に 1 時間以上経過してしまった。そこで大事でと思ったことは、被災地の状況を考える時は自分たちの地域に、被災者のことを考える時は自分たちに置き換えることで、上村先生曰く他人事で終わらせないことが必要だ。また、ここではお世話になった方々にお礼の手紙を作成することが決められた。このことは、『高校生、災害と向き合う』の著者である諏訪清二さんがおっしゃるように、被災後数年は他地方から支援やボランティアがたくさん来てくれるが、時間の経過とともにその数は少なくなる。それはある意味復興の表れだが、被災地から見ると、忘れ去られているという感覚にもつながりかねない。だからこそ、もう 1 度訪ねることは大きな意義がある。諏訪さんは感覚として 3 回行くことを目安にしているが、行くことが困難な場合は、こうした手紙を送ることも立派なことだと思う。2 日目も無事終了した。

そして最終日。朝から快晴で、これは絶対に日焼けすると思い、皮膚が見える箇所の日焼け止めを塗った。小田の浜に着くと、「はまべのちから 2014」にイベント応援スタッフとして参加した。そこでは現地の方がとても賑やかに活動していて、私も働き甲斐があった。私は、テントを設置した後に、砂浜でゴミや貝など素足で踏むと危険なものを取り除いた。最初は炎天下で大変だと思い、怠けたらせかくの機会が無駄になってしまうと感じたので、自らにプレッシャーをかける意味で現地のイベント T シャツを着たのだが、やっていくうちに感覚が研ぎ澄まされ、無心に拾っていた。とても作業のような感じではなかった。そして、ビーサン飛ばし大会では参加賞として OB の先輩と一緒に飲み物を配ったが、老若男女たくさんの方がいて、接し方が難しかった。幸いにも先輩が率先してコミュニケーションを取って下さったので助かった（冷汗）。イベントに参加して分かったことは、何か物事に取り組む際に、そのことだけに集中して初志貫徹することが大切だが難しいということだ。自ら主体的にそれを成し遂げることが、ボランティアの本来の姿なのだと思う。こうして任務をやり遂げ、イベント会場を後にした。何だかとても充実したように思えたのを、今でも覚えている。その後、お土産などを買いながらバスで一ノ関まで移動し、今まで大変お世話になったバスの方と別れを告げ、新幹線のホームへと向かった。そこで目の当たりにしたのが、駅を通過する新幹線のスピードだ。その時は強がっていたのだが、正直腰が抜けそうになった。先生方も大変驚かれたようで、上村先生が「あんな速さだったら摩擦熱で燃えちゃうでしょ。いやあー、日本の技術ってやっぱすげーな。」（上村先生すみません。あくまでも私のイメージです…）的なことをおっしゃっていて、確かになあーと思った。そして新幹線に乗ると、心外にも友達と会話で盛り上がりすぎてしまって、かなりマニアックなことまで話が及んだ。勝手に自分が思っているだけなのだがそれぞれの内容が深く、進学校ならではだ、と思った。小学生では絶対に話についていけないと自負している（苦笑）。そして本当にあつという間に 2 時間が過ぎ、東京駅に着いた。こうして 3 日目も終了し、東北・被災地巡検旅行は幕を閉じた。

こうして振り返ると、それぞれ内容が濃く、とても充実した3日間であったと思う。このようなことは簡単にはできないことで、そのようなことができたことに心底感謝している。やはり思うことは、価値ある貴重な体験から得られるものは非常に大きいし、充実したものである、ということだ。自分自身の進路選択という意味でも、今回のような有意義で貴重な経験をするのは非常に価値が高いものである。では最後に、私がこの3日間を通して今後取り組みたいと思うことを紹介する。2点あり、まず1点目は、福島県に行きたいということだ。語り部さんの話でもあったように復旧の進行は地域によって様々であるが、福島県は他地域に比べ立ち遅れているらしい。原発や指導者の問題が考えられると語り部さんもおっしゃっていたが、やはりこういうことは自分の目で確かめることが1番である。2点目は、もう1度ボランティアをしたいということだ。しかし、ボランティアはボランティアでも、今回のような学校の敷いたレールの上を走っただけで満足するのではなく、卒業しても自分で参加の方法を見つけ、可能な範囲で参加するようなボランティアだ。こうすることで、2泊3日だけでは見えなかった面も見えるようになるかもしれない。今は計画性もなくお金の問題などもあるので厳しいが、この3日間で終わりにほしくない。東北地方太平洋沖地震が発生してから3年半ほど経つが、まだまだ困っている方はたくさんいるはずだ。現地の状況も刻々と変わりつつある。そうしたことを自発的に、積極的に考え、行動できるような男になりたい。しかし、それはあまりにも漠然としていて大き過ぎるので、今は自分の身の丈を知り、まずは身近なことから始めていこうと思う。

* 東北被災地巡検旅行の感想(1329H)

私は、この巡検旅行の前に提出した動機で、復興の進み具合をこの目で確かめることを、目的の一つと据えていた。理由は、マスコミの「復興が進んでいない」という報道の数々だ。しかし、1日目のバスで、先生から「マスコミの情報は、マスコミの意思で切り取られているもので、必ずしも真実ではない」と言われた。実際に、地域による復興の違いが明らかで、さらに現地では「復興」だけでなく、他の様々な問題が絡みあっているようで、結局のところ、目的の復興以外のことも多く知ることができた。このように色々な面から見た震災を学べたので、この感想をまとめることも難しいが、ここでは目的の復興や災害に関して感じたことを、バスの中での感想と多少重なるが、書くこととする。

一つ目は、やはり復興に地域差があったことだ。これは今回の巡検旅行で一番感じたことでもある。具体的に述べれば、町の規模が小さい南三陸では復興は進み、被災場所が点々とする気仙沼では復興は進んでいない。これも一概には言えないが、すくなくともこういった傾向が見られると思う。盛土など、高台移転が進む地域がよく見られた。以前もその様なことがあったらしい。しかし、漁師などは結局海岸近くに戻ると、語り部の方がおっしゃっていた。今回もしばらくしたら、そういったことが起こるのではないか。その時、どう対処すればよいのか。自分の中でも今考えている。

2日目の気仙沼の研修では、昭和8年の昭和三陸地震の教訓として建てられた石碑を2ヶ所を見た。表には教訓の言葉が、裏には犠牲者などの詳細な被害状況が刻まれていた。しかし、語り部の方曰く、この石碑は忘れ去られていたという。震災以前、この石碑はただの置物に過ぎず、

地元の方々の心に刻まれてはいなかったのだ。これは別に誰のせいというわけでもないと思う。こういった災害の「風化」はやむを得ない。震災未経験者が増えるにつれて、それは進行してしまう。しかし、そのままでは次の震災でも甚大な被害が出てしまう。では、どうすればよいのだろうか。今の段階で答えを知ることはできないが、まずは今回の巡検旅行やボランティア活動などに、若い世代が積極的に参加していくことがよいと思う。若者たちは今後、同じような災害に遭う可能性が高いからだ。次の災害で、危機感を持って行動できる人がいないと、また同じことが繰り返される。そのためにも、若者の参加が重要だと思う。そして、参加のしやすい体制作りも重要だ。震災が起きてしまうことは自然災害として、ある程度仕方のないことだ。しかし、その後の復興の進め方や語り継ぎによって、次の災害の被害状況はかなり変わるのではないだろうか。

今回の巡検旅行で、私は勿論被災地の全体をみたわけではない。むしろ、もう一回見る必要があると思う。まだ、津波の恐ろしさや地元の方々の心境を、十分に理解できていないからだ。今後こういった機会があれば、積極的に参加していきたい。そして、その時には先生もおっしゃられていた、「自分に置き換える」ことを実践し、より理解を深めたい。

最後になったが、今回の巡検を企画して下さった先生方、被災地の状況を丁寧に説明して下さった語り部やバスガイドの皆さんに感謝申し上げます。

*** 東北研修感想(4134H)**

僕は今回の研修で3つのことを学びました。

1 つ目は津波が来たとき車で避難するのと徒歩で避難するのとどちらが生き延びる確率が高いかについてです。初日の南三陸町の語り部は車で避難して助かった一方で、二日目の気仙沼、陸前高田市の語り部は歩いて逃げたほうが良いと話していました。確かに車で逃げた際渋滞などで動けなくなり助からないという危険性がありますが、徒歩と比べて断然早いという利点があります。徒歩の場合、渋滞などに巻き込まれ身動きが取れなくなることがなく、段差などでも自由に動けるといいますが、一方で長距離動けないなどといった危険性があります。したがって車と徒歩を組み合わせれば非難するのが最も良い避難方法ではないかと思います。このような危険が迫った場合ではなくとも状況に応じて合理的に冷静に非難することの大切さも痛切に感じました。

2 つ目は大きく感じられたのは物事の二面性です。東北の方々は震災の際、津波、海の怖さについて感じた一方、海岸で楽しそうに遊んでいる姿を見ました。このようにどんな嫌なことでもその一方でプラスの面もあるのではないかと思います。

3 つ目は苦しんでいるときに手を差し伸べてくれる人がいるということです。震災の直後にすぐに食事を配り、がれきの撤去を手伝った自衛隊の人々、各地から届いた物資の数々、さらに外国の方々からの支援など厳しい状況だったからこそその人たちの優しさを感じました。

今回学んだことを忘れずに生かしていきたいです。